

4種混合予防接種（ジフテリア・百日せき・破傷風・不活化ポリオ）の説明

接種対象年齢	生後2か月から7歳6か月に至るまで
望ましい接種年齢	1期初回接種を生後2か月～12か月の間に3回
ワクチンの種類	不活化ワクチン（不活化ワクチンとトキソイドの混合ワクチン）
予防する病気	<p><ジフテリア> ジフテリア菌の飛沫感染で起こります。現在では患者発生数は年間0～1人程度です。しかし、ジフテリアは感染しても10%程度の人に症状が出るだけで、残りの人は症状がでない保菌者となり、その人を通じて感染することもあります。 感染は主にのどですが、鼻にも感染します。症状は高熱、のどの痛み、犬吠様のせき、嘔吐などで、偽膜と呼ばれる膜ができて窒息死することもあります。発病2～3週間後には菌の出す毒素によって心筋障害や神経麻痺を起こすことがあるため注意が必要です。</p> <p><百日せき> 百日せき菌の飛沫感染で起こります。最近長びくせきを特徴とする思春期、成人の百日せきがみられ、乳幼児への感染源となり重症化する例がありますので注意しましょう。百日せきは、普通のかぜのような症状ではじまります。続いてせきがひどくなり、顔をまっ赤にして連続的にせき込むようになります。せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音が出ます。熱は通常でません。乳幼児はせきで呼吸ができず、くちびるが青くなったり（チアノーゼ）けいれんが起きることがあります。肺炎や脳症などの重い合併症を起こします。乳児では命を落とすこともあります。</p> <p><破傷風> 破傷風菌はヒトからヒトへ感染するのではなく、土の中にいる菌が、傷口からヒトの体内に入ることによって感染します。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素のために、筋肉のけいれんを起こします。最初は口が開かなくなるなどの症状が気付かれ、やがて全身のけいれんを起こすようになり、治療が遅れると死に至ることもある病気です。患者の半数は本人や周りの人では気が付かない程度の軽い刺し傷が原因です。土中に菌がいるため、感染する機会は常にあります。また、お母さんが抵抗力（免疫）をもっていれば出産時に新生児が破傷風にかかるのを防ぐことができます。</p> <p><ポリオ> ポリオ（急性灰白髄炎）は「小児まひ」と呼ばれ、わが国でも1960年代前半までは流行を繰り返していました。予防接種の効果によりわが国では、1980年を最後に野生株ポリオウイルスによる麻痺患者の発生はなくなりました。しかし、現在でも海外では発生が見られており、これらの地域で日本人がポリオに感染したり、日本にポリオウイルスが入ってくる可能性があります。 ポリオウイルスに感染すると100人中5～10人は、かぜ様の症状があり、発熱を認め、頭痛、嘔吐があらわれます。また、感染した人の中で、約1,000～2,000人に1人の割合で手足の麻痺を起こします。一部の人には、その麻痺が永久に残ります。麻痺症状が進行し、呼吸困難により死亡することもあります。</p>
接種回数	<p>●標準的な接種</p> <p>1期初回接種：20日から56日までの間隔をおいて3回</p> <p>1期追加接種：初回接種終了後1年から1年半の間隔をおいて1回</p> <p style="text-align: center;">20日から56日までの間隔 20日から56日までの間隔 1年から1年半の間隔</p> <pre> graph LR A[初回1回目] -- "20日から56日までの間隔" --> B[初回2回目] B -- "20日から56日までの間隔" --> C[初回3回目] C -- "1年から1年半の間隔" --> D[1期追加] </pre>
実施時期	年間通じて実施
実施場所	個別予防接種実施医療機関
副反応	<p>注射部位の発赤・腫脹（はれ）、硬結（しこり）などの局所反応や発熱などの副反応がみられ、ほとんどが接種3日後までにみられています。</p> <p>接種部位の発赤や腫脹（はれ）は3～4日で消失しますが、熱感や発赤の強いときには患部の冷湿布を行います。また硬結（しこり）は次第に小さくなるが1か月後でも残る場合がありますが放置してかまいません。</p>